

男性のみだしなみ行動と自己愛的な人格傾向との関連

鳥居 さくら

神戸松蔭女子学院大学人間科学部

Author's E-mail Address: torii@shoin.ac.jp

Relationship between appearance modifying behavior and narcissistic tendency in Japanese males

TORII Sakura

Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

日本人男性におけるみだしなみ行動と自己愛傾向との関連を検討することを目的とした。みだしなみ行動関連項目として、みだしなみの頻度、好み、費用、素顔を見られることを許容する程度などを設定し、自己愛傾向を測る尺度として自己愛人格目録短縮版 (NPI-S) を用い、健常な男性 139 名に対して実施した。みだしなみ行動に関する項目を因子分析したところ 2 因子が抽出され、「外見への関心」と「素顔を見られることの許容」と名付けた。この 2 因子を用いたクラスタ分析の結果、調査対象者は 4 群に分かれた。それぞれ「外見への関心」が中程度で「素顔を見られることの許容」が低い「みだしなみ適度」群、「外見への関心」は低く「素顔を見られることの許容」は高い「みだしなみ自然」群、「外見への関心」は低く「素顔を見られることの許容」も低い「みだしなみ消極」群、「外見への関心」が最も高く「素顔を見られることの許容」も高い「みだしなみ積極」群と名付けた。これら 4 群の自己愛得点を比較したところ、「みだしなみ積極」群で自己愛総合の得点が有意に高く、そのなかでも自己愛得点の低位尺度である自己主張性得点が高いことが明らかになった。外見に高い関心があり素顔を見られることに抵抗が無い男性は、自己愛が高く、自己主張性が高いことが示唆された。

Excessive preoccupation with appearance is one of the characteristics of narcissism. I investigated the relationship between appearance modifying behavior to adjust appearance and narcissistic tendency in healthy Japanese men. Cost, time, and frequency of the behavior to modify appearance, and perception of one's face without modification were assessed as appearance modifying items in order to evaluate

the appearance modifying behavior. Furthermore, the Narcissistic Personality Inventory-Short version (NPI-S) was used. These assessments were performed on 131 healthy males. A factor analysis of the behavior-related items extracted two factors, namely, "acceptance of the real face" and "interest in appearance." A cluster analysis using the two factors divided the subjects into four groups: "moderate adjustment of appearance", "natural adjustment of appearance", "negative adjustment of appearance", and "positive adjustment of appearance". The "positive adjustment appearance" group's NPI-S score was significantly higher than that of the other three groups. In particular, the score for sense of self-assertiveness was high. This suggested that men with acceptance of their real face and high interest in appearance showed a high level of narcissism and a sense of self-assertiveness in particular.

キーワード：自己愛、外見、素顔、自己主張性

Key Words: Narcissism, Appearance, Real face, Self-assertiveness

1. 緒言

外見は非言語コミュニケーションとしての役割を持つ。外見には、身体装飾、被服、ジェスチャー、顔面の表情、姿勢などが挙げられ (Kaiser, 1985)、対面した相手の外見からはその人のアイデンティティ、価値、気分、態度などを評価することができる (Kaiser, 1985)。

外見を操作する方法のひとつとしてみだしなみを整える行動がある。例えば、顔を洗う、髪の毛をとく、男性なら髭をそる、女性ならメイクアップを施すなどの行動である。女性の化粧と性格や人格の特性との関連については次のようにいくつか報告されている。公的自己意識の高い人は化粧をする量が多く、化粧することにより良好な対人関係を築けるという考えをもっている (Miller, 1982)。公的自己意識の高い人ほど周囲の状況に関係なく化粧をする傾向がある (Cash & Cash, 1982)。自尊心が高い人は美しくない自分を見られたくないという意識が働くために化粧することを必要だと感じている (笹山・永松, 1999)。

また自己愛に注目し、化粧に高い関心があり素顔にほどほどの自己評価をもつ青年期の女性は、自己愛が高く、なかでも優越感・有能感が高いことが示されている (鳥居・鳥居, 2016)。たいした症状もないのに精神科を受診する患者の特徴として、日常的には受け身的な行動をするが、高級な服装、食べ物、化粧を好み、美容整形など自分の好きなことは実現し、甘えの態度を出して周囲の援助を求め、自分は何でもできるという幻想を持つ一方、現実感希薄で社会性に乏しいことが指摘されている (大平, 1990)。このように、自己愛が高い傾向のある女性は化粧行動が活発になる可能性のあることが示されている。

自己愛的な人格傾向を測定するものとして、自己愛性パーソナリティ障害を一般的な性格傾向として測定しようとしたNPIという測定尺度がある (Raskin & Hall, 1979)。この尺度は自己愛性パーソナリティ障害の診断基準を項目化したもので、「私は、他人より有能な人間であると思う」「私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある」「私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う」などの項目からなる。小塩はNPIの短縮版である30項目から構成されるNPI-Sを作成している (小塩, 1999)。

男性のみだしなみに関わる行動と自己愛的な人格特性との関連について検討された研究は少ない。本研究では、病的で防衛的な自己愛と健常の自己愛とは連続しているものと考え、健常な日本人男性を調査対象とし、男性のみだしなみに関わる行動に関する項目を新たに作成したものと、自己愛的な人格特性を測定する項目としてNPI-Sとを用いて調査し、それらの関連を検討することを目的とする。

2. 方法

2.1. 調査対象者

男性 139 名（19～84 歳、平均年齢 50.9 歳、SD=17.68）であった。欠損値のあるデータを除き、131 名分を分析対象とした。年齢分布を Fig.1 に示す。

2.2. 調査項目

男性のみだしなみに関する項目と自己愛に関する人格傾向を測定する項目を設定した。

男性のみだしなみ行動に関連する項目としては以下を使用した。水で洗顔する、洗顔料で洗顔する、化粧水を顔に使う、UV ケア品を顔に使う、髭をそる、眉をカットする、くしやブラシで髪を整える、整髪剤を使う、制汗剤を使う、香水、オードトワレ、オーデオロンなどを使う、それぞれについて「電車に乗ってどこかに外出するとき、どの程度みだしなみを整えますか」をしない (1)、あまりしない (2)、時々する (3)、毎回する (4) の 4 件法で尋ねた。また「顔や身体の手入れをすることは好きですか」「髪の手入れをすることは好きですか」は嫌い (1)、やや嫌い (2)、やや好き (3)、好き (4)、「みだしなみや顔や身体や髪の手入れに関する本や雑誌などの記事を読むのは好きですか」は読まない (1)、あまり読まない (2)、時々読む (3)、読む (4)、「スポーツジムに行きますか」「エステサロンに行きますか」は行かない (1)、あまり行かない (2)、時々行く (3)、行く (4) の 4 件法で、「1 日でトータルしてどの程度顔や身体や髪の手入れに時間をかけますか」「1 カ月で平均してどの程度顔や身

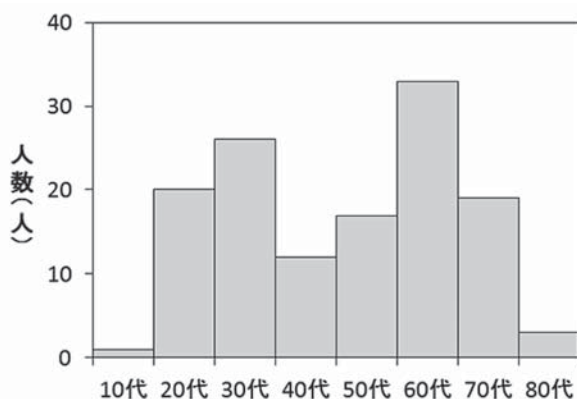


Fig.1 調査対象者の年齢分布

体や髪の手入れのための商品を購入しますか」の2項目は時間や費用の金額を尋ねた。

男性自身の自分の容貌に関係する項目として、「顔や身体や髪の手入れをしたときの自分の容貌をどのように感じていますか」は満足していない(1)、あまり満足していない(2)、まあまあ満足している(3)、満足している(4)、「顔や身体や髪の手入れをしていないときの自分の容貌をどのように感じていますか」は受け容れられない(1)、あまり受け容れられない(2)、まあこんなものと思っている(3)、こんなものと思っている(4)、「友人に素顔を見られることをどのように感じますか」「恋人がいると仮定して、恋人に素顔を見られることをどのように感じますか」の2項目はよくない(1)、あまりよくない(2)、まあよい(3)、よい(4)、「外に鏡や反射板などの姿や映るものがあると、自分の姿をチェックしますか」しない(1)、あまりしない(2)、少しする(3)、する(4)の4件法で尋ねた。

自己愛傾向を測定する尺度としては、自己愛人格目録短縮版(NPI-S)(小塩, 1999) 30項目を用いた。例えば「私は、他人より有能な人間であると思う」「私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある」「私は、自己主張が強いほうだと思う」であった。これらの質問項目に対し、“まったく当てはまらない(1)”から“とてもよくあてはまる(5)”の5件法で尋ねた。自己愛人格目録短縮版(NPI-S) 30項目は、「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」各10項目から構成されており、全項目の合計を「自己愛総合」得点とした。「優越感・有能感」は自己の重要性に関する誇大な感覚、「注目・賞賛欲求」は過剰な賞賛を求め、「自己主張性」は尊大で傲慢な行動または態度をとる、というDSM-5(高橋・大野, 2014)の記述に相当すると考えられる。

2.3. 手続き

神奈川県と静岡県にあるメーカーの事業所に協力を依頼し、参加の有無は自由であることを伝え、協力可能な参加者から回答を得た。アンケート用紙を用い回答は無記名で実施した。

3. 結果

3.1. みだしなみ行動関連項目の分析

1日のうち顔や身体や髪の手入れに費やす時間は0～15分、16～30分、31～45分、46分以上に、1ヶ月の顔や身体や髪の手入れに関係する商品の購入費用は、0～999円、1000～1999円、2000～3999円、4000円以上に分類し、それぞれ1から4の値をあてはめた。

みだしなみ行動関連22項目の平均値と標準偏差を算出した。「UVケアをする」「香水、オードトワレ、オーデオロンなどを使う」「スポーツジムに行きますか」「エステサロンに行きますか」「1日のうち顔や身体や髪の手入れに費やす時間」はフロア効果が見られ、「水で洗顔する」「髭をそる」は天井効果が見られたため以降の分析から除外した。

残りの15項目に対して主因子法による因子分析を実施した。固有値の変化は3.97、2.17、1.39、1.11、0.90、…というものであり、因子の解釈可能性を考え2因子構造が妥当であると考えられた。そこで2因子を仮定して、主因子法、Promax回転による因子分析をおこなった。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった3項目を分析から除外し、再度、主因子法、

Table1 みだしなみ行動に関する尺度の因子分析結果 (Varimax 回転後の因子行列)

項目内容	I	II	共通性
顔や身体の手入れをすることは好きですか	.79	.55	0.63
髪の手入れをすることは好きですか	.75	-.21	0.61
整髪剤をどの程度使いますか	.60	-.14	0.38
みだしなみや顔や身体や髪の手入れに関する本や雑誌などの記事を読むのは好きですか	.55	.09	0.32
外に鏡や反射板などの姿の映るものがあると、自分の姿をチェックしますか	.54	-.07	0.30
化粧水をどの程度顔に使いますか	.50	.15	0.27
くしやブラシで髪をどの程度整えますか	.48	-.22	0.28
1ヶ月で平均してどの程度顔や身体や髪の手入れのための商品を購入しますか	.48	.04	0.23
眉をどの程度カットしますか	.44	.19	0.23
制汗剤をどの程度使いますか	.37	.16	0.16
恋人がいると仮定して、その人に素顔を見られることをどのように感じますか	-.03	.92	0.85
同性の友人に素顔を見られることをどのように感じますか	.01	.78	0.61
因子寄与	3.19	1.68	
寄与率(%)	26.62	13.99	
累積寄与率(%)	26.62	40.61	

Promax 回転による因子分析をおこなったところ、はっきりとした2因子が得られた。2つの因子間の相関は -.124 と低い値であり、ほぼ直交していると考えられた。2因子がほぼ直交していたため、主因子法、Vrimax 回転による因子分析を行った。因子分析表を Table 1 に示す。累積寄与率は 40.61% であった。

2つの因子は次のように解釈された。第1因子は「顔や身体の手入れをすることは好きですか」「髪の手入れは好きですか」「整髪剤の使用頻度」「みだしなみに関する記事を雑誌などで読む頻度」「鏡などで自分の姿をチェックする頻度」「化粧水を使用する頻度」「くしやブラシで髪を整える頻度」「1ヶ月の身体のお手入れ商品の購入額」「眉カットの頻度」「制汗剤の使用頻度」の10項目が正の負荷量を示していた。そこで「外見への関心」因子と名付けた。第2因子は「恋人に素顔を見られることに対する許容度」「友人に素顔を見られることに対する許容度」の2項目で構成されていたので、「素顔を見られることの許容」因子と名付けた。

3.2. 下位尺度間の関連

みだしなみ関連行動の因子分析結果において、2つの因子に高い負荷量を示したそれぞれの項目の平均値を算出し、各下位尺度得点とした。「外見への関心」下位尺度得点は平均 2.29、標準偏差 0.58、「素顔を見られることの許容」下位尺度得点は平均 3.30、標準偏差 0.65 であった。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「外見への関心」では $\alpha=.80$ 、「素顔を見られることの許容」では $\alpha=.86$ と十分な値が得られた。化粧行動関連の下位尺度の相関は -.03 であった (Table 2)。

Table2 みだしなみ行動下位尺度と自己愛得点との相関

	〈みだしなみ行動に関する下位尺度〉	
	外見への関心	素顔を見られることの許容
外見への関心	-	-.03
素顔を見られることの許容	-.03	-
自己愛総合	.34 ***	.09
〈自己愛下位尺度〉		
優越感・有能感	.29 ***	.04
注目・賞賛欲求	.30 ***	.08
自己主張性	.28 **	.11

*** $p < .001$, ** $p < .01$

3.3. みだしなみ行動による分類

みだしなみ行動関連尺度の「外見への関心」下位尺度得点と「素顔を見られることの許容」下位尺度得点を用いて、グループ内平均連結法によるクラスタ分析を行ったところ、4つのクラスタが得られた。第1クラスタには39名、第2クラスタには44名、第3クラスタには34名、第4クラスタには14名の調査対象者が含まれていた。 χ^2 検定を行ったところ、有意な人数比率の偏りが見られた ($\chi^2=15.84$, $df=3$, $p<.001$)。

4つのクラスタにおける「外見への関心」と「素顔を見られることの許容」の下位尺度得点の平均値をFig.2に示す。得られた4つのクラスタを独立変数、「外見への関心」「素顔を見られることの許容」の下位尺度得点を従属変数とした1要因分散分析を行った。その結果、「外見への関心」「素顔を見られることの許容」のいずれにも有意な群間差が見られた ($F(3,127)=71.18$, $p<.001$, $F(3,127)=124.62$, $p<.001$)。TukeyのHSD法による多重比較を5%水準で行ったところ、「外見への関心」については第4クラスタが最も高い値をとり、次に第1クラスタがつづき、第2クラスタと第3クラスタは低い値であった。「素顔を見られることの許容」については第2クラスタと第4クラスタの値が高く、第1クラスタと第3クラスタの値は低い結果が得られた。

4つのクラスタを独立変数、年齢を従属変数とした1要因分散分析をおこなったところ、有意な群間差が見られた ($F(3,127)=15.20$, $p<.001$)。クラスタに分けた年齢分布をFig.3に示す。TukeyのHSD法による多重比較を5%水準で行ったところ、第1クラスタ=第3クラスタ>第2クラスタ=第4クラスタという結果が得られた。第1クラスタの平均年齢は57.1歳、第3クラスタの平均年齢は60.6歳であり、これらは比較的年齢の高いグループだった。一方、第2クラスタの平均年齢は41.2歳、第4クラスタの平均年齢は39.1歳であり、比較的年齢の低いグループだった。

第1クラスタは「外見への関心」は中程度、「素顔を見られることの許容」は低かった。素顔を周囲の人に見られることには抵抗があり、ほどほどのみだしなみをする層だと考え「み

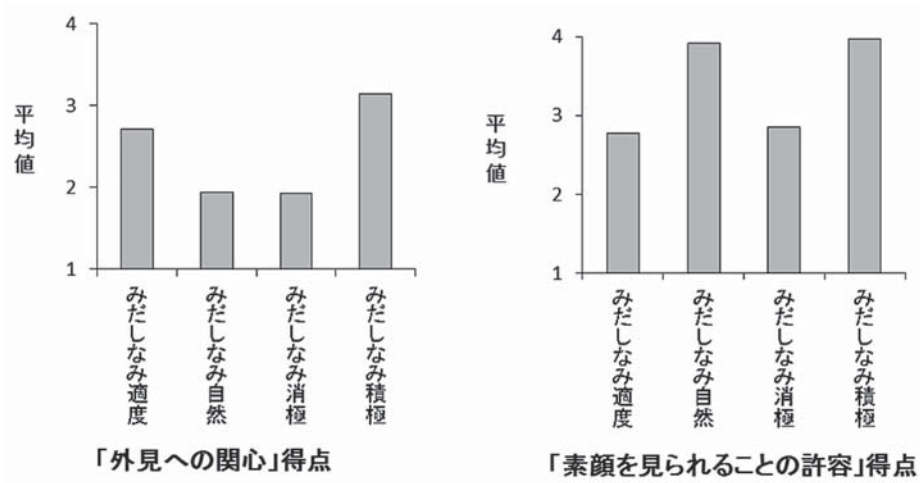


Fig.2 みだしなみ行動スタイル4群の「外見への関心」と「素顔を見られることの許容」下位尺度得点

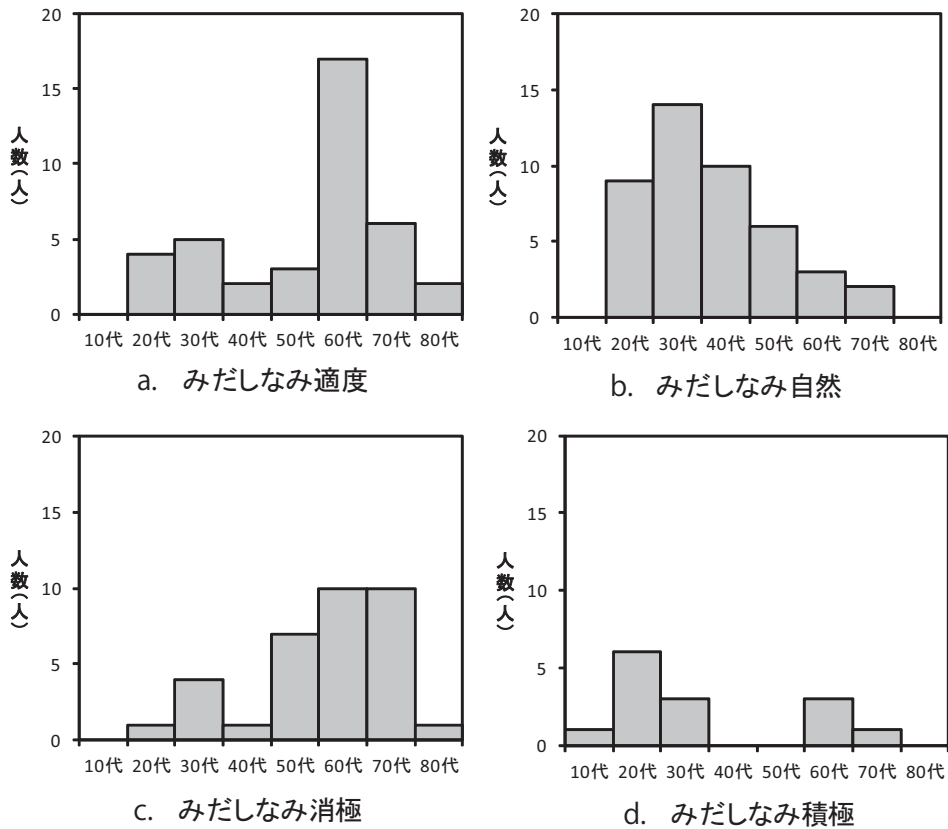


Fig.3 みだしなみ行動4群の年齢分布

だしなみ適度」群とした。第2クラスは「外見への関心」は低く、「素顔を見られることの許容」は高かった。素顔を周囲の人に開示することは平気で、外見への関心が低いことから「みだしなみ自然」群とした。第3クラスは、「外見への関心」は低く、「素顔を見られることの許容」も低かった。素顔を見られることに抵抗感があり、外見への関心もたいてないことから「みだしなみ消極」群とした。第4クラスは「外見への関心」はもっとも高く、「素顔を見られることの許容」も高かった。自分のみだしなみを整えることに積極的に行動し、素顔を見られることを構わないと考えている層だと考え「みだしなみ積極」群とした。

3.4. みだしなみ行動スタイルと自己愛傾向との関係

4つのみだしなみ行動のスタイルによって自己愛的な人格傾向の違いを検討するために、「自己愛総合」得点と、「自己愛総合」の下位尺度である「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の得点を従属変数として1要因の分散分析をおこなった。3群の自己愛総合得点を Fig.4 に、優越感・有能感得点、注目・賞賛欲求得点、自己主張性得点を Fig.5 に示す。自己愛総合得点の分散分析の結果、群間の得点差は5%水準で有意であった ($F(3,126) = 3.31, p < .05$)。TukeyのHSD法による多重比較(5%水準)を行ったところ、「みだしなみ消極」群と「みだしなみ積極」群との間に有意な得点差が見られ、そのほかの群間には有意差が見られなかった。「みだしなみ消極」群より「みだしなみ積極」群のほうが自己愛総合得点が高かった。優越感・有能感得点、注目・賞賛欲求得点、自己主張性得点の1要因分散分析の結果、自己主張性のみ群間の得点差が1%水準で有意であった ($F(3,126) = 4.18, p < .01$)。Tukeyの

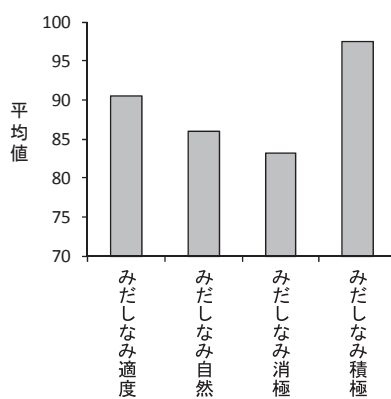


Fig.4 みだしなみ行動スタイル4群の自己愛総合得点

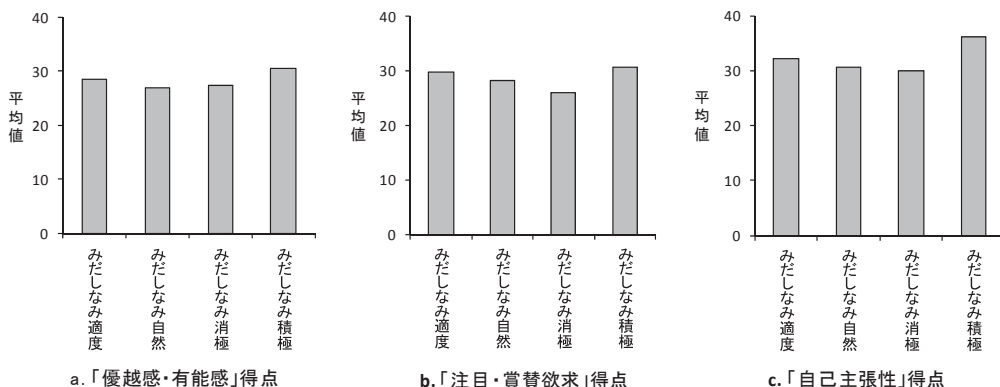


Fig.5 みだしなみ行動スタイル4群の自己愛下位尺度得点

HSD法による多重比較(5%水準)を行ったところ、「みだしなみ消極」群と「みだしなみ積極」群との間、「みだしなみ自然」群と「みだしなみ積極」群との間に有意な得点差が見られ、いずれも「みだしなみ積極」群のほうが自己主張性得点が高かった。

4. 考察

自己愛の臨床像から病的な自己愛は大きく2つのタイプに分けられることが報告されている(Gabbard, 1989, 1994)(Wink, 1991)。過剰に気にかける自己愛者と周囲を気かけない自己愛者、もしくは傷つきやすさ一敏感さの次元と誇大性一顕示性の次元の組み合わせによる秘かな自己愛と顕かな自己愛である。病的な自己愛と健全な自己愛は連続していると考え、健全な調査対象者におけるみだしなみ行動スタイルと自己愛の2つのタイプとの関係を検討する。

本研究で得られた「みだしなみ積極」群は外見への関心が高く、素顔を見られることを許容する傾向がある。他者に自分の素顔を見られることには拒否感がなく、自分の外見に高い関心を持っていると考えられる。また、この群は他の群と比較し、自己愛総合得点が高く、なかでも自己主張性が高い特徴がみられた。自己主張性が高いことから、顕かな自己愛が高いものと考えられる。この群に属する割合は、今回の男性の調査対象者の約10%であった。一方、青年期女性を調査対象とし自己愛と化粧行動との関連を検討した研究(鳥居・鳥居, 2016)では、化粧への関心が高く、素顔を見られることの許容は中程度の「積極的化粧」群が得られている。この群は女性の調査対象者の47%にも及び、自己愛総合得点が最も高く、自己愛下位尺度の優越感・有能感が他の群と比較して高い得点をとっていた。これら2つの研究結果を比較すると、みだしなみや化粧に関わる行動が積極的であるという点は共通しているが、自己愛得点のなかで高くなった下位尺度が性別によって異なり、男性では自己主張性、女性では優越感・有能感が高かった。男女の自己愛を比較した研究では、男性のナルシストには自己誇大傾向がみられるが、女性にはそのような傾向はみられず、女性は魅力的な他者と一体化することで社会的勢力を高めようとする傾向がみられるとされている(Morf & Rhodewalt, 2001)。自己愛の高い男性は他者より優位に見せようとして、積極的にみだしなみや言論などの行動で自分自身をアピールするために自己主張性が高くなり、自己愛の高い女性は魅力的な他者と外見のよさでレベルを合わせることで自分の有能性を保とうとする傾向があると推測される。

「外見への関心」と「素顔を見られることの許容」の下位尺度得点を用いたクラスタ分析の結果4つのクラスタが得られた。素顔を見られることの許容が低い2つの群に属する調査対象者の平均年齢は57.1歳と60.6歳、素顔を見られることの許容が高い2つの群に属する調査対象者の平均年齢は41.2歳と39.1歳であり、素顔を見られることの許容が低い2つの群の年齢と素顔を見られることの許容が高い2つの群の年齢との間に有意差がみられた。このことから、素顔を見られることの許容は年齢にも関係していることがうかがえる。年齢が比較的高い男性は周囲に素顔を見られることに拒否感のある人が多く、年齢が比較的低い男性は周囲に素顔を見られても構わないと感じている人が多いことが推察される。ただし、各クラス

タの年齢分布 (Fig.3) を見ると、平均年齢が低い群であっても 60 代や 70 代の調査対象者も含まれ、またその逆もあり、どの年代の男性も各クラスに存在していることが確認できる。素顔を見られることの許容については年代による傾向は確かに見られるが、それ以外の要因もあると考えられる。

男性における顔のお手入れについて、男性がメイクアップすることは歴史的に見ても珍しいことではないが、日本では 1980 年代半ば以降、男性はメイクアップをするよりもスキンケア品を用いた素肌の手入れに重点が置かれるように変化していったとされる (村澤、1992)。魅力的な男性像は、眉をりりしく描き、肌を日焼け色にして男らしさを強調したものから、毛の存在はできるだけなくし清潔感を感じさせるものへと変化した。したがって、みだしなみを整える行為にもそのことが反映され、外見的な魅力を高めたいと考える男性は、髪、ひげ、眉などの毛の手入れや消臭に重きを置くようになったと考えられる。このような時代による魅力的な男性像の変化が、素顔を見られることに対する世代感覚の違いに一部影響を与えているのではないかと考えられる。

本研究では日本人男性を対象として、みだしなみに関わる行動と自己愛傾向について調査した。その結果、みだしなみに関する項目から「外見への関心」「素顔を見られることの許容」の因子を抽出した。これらの程度から調査対象者を 4 群に分け、それぞれ「みだしなみ適度」「みだしなみ自然」「みだしなみ消極」「みだしなみ積極」群と名付けた。「みだしなみ積極」群が最も自己愛総合得点が高く、なかでも自己主張性の得点が高いことが示唆された。化粧行動に積極的な女性は自己愛総合得点が高く、そのなかでも優越感・有能感が高い傾向がみられている (鳥居・鳥居、2016) ことと比較し、化粧に積極的な行動を示す女性とみだしなみに積極的な行動を示す男性は共通して自己愛的な人格傾向は高いが、その自己愛的な人格傾向の内容に性差が存在している可能性を論じた。

参考文献

- Cash, T. F., & Cash, D. W.: Women's use of cosmetics: Psychosocial correlates and consequences. *International Journal of Cosmetic Science*, 4, pp.1-14 (1982).
- Gabbard, G. O.: Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bull Menninger Clin* 53, pp.527-532 (1989).
- Gabbard, G. O.: *Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice: The DSM-IV Edition*, American Psychiatric Press (1994).
- (ギャバード, G. O., 舘 哲郎 (監訳): 精神力動的精神医学 その臨床実践 [DSM- IV 版] ③臨床編: II 軸障害、岩崎学術出版社 (1997)).
- Kaiser, S. B.: *The social psychology of clothing and personal adornment*, Macmillan Publishing Company (1985).
- (カイザー, S. B., 高木修・神山進 (監訳): 被服と身体装飾の社会心理学 (下巻) 一装

- いのこころを科学する一、北大路書房（1994）.
- Miller, L. C., & Cox, C. L.: For appearances' sake: Public self-consciousness and makeup use, *Personality and Social Psychology*, 8, pp.748-751（1982）.
- Morf, C. C., & Rhodewalt, F.: Unraveling the paradoxes of narcissism: A dynamic self-regulatory processing model. *Psychological Inquiry*, 12, pp.177-196（2001）.
- 村澤博人：顔の文化誌，東京書籍（1992）.
- 大平健：豊かさの精神病理，岩波新書（1990）.
- 小塩真司：高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連，*性格心理学研究*，8, pp.1-11（1999）.
- Raskin, R., & Hall, C. S.: A narcissistic personality inventory, *Psychological Reports*, 45, 590（1979）.
- 笹山郁生，永松亜矢：化粧行動を規定する諸要因の関連性の検討，*福岡教育大学紀要 第4分冊 教職科編*，48, pp.241-251（1999）.
- 高橋三郎，大野裕（監訳）：DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引，医学書院（2014）.
- 鳥居（井上）さくら，鳥居潤：女子大学生における化粧行動と自己愛的な人格傾向との関連，*日本顔学会誌*，16（2），pp.61-69（2016）.
- Wink P.: Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, pp.590-597（1991）.

（受付日：2016. 12. 10）

